

---

# テスカ

勝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テスカ

### 【Nコード】

N1772Q

### 【作者名】

勝

### 【あらすじ】

20年前・・・2000年。北極圏付近の上空にて隕石の確認。全人類の約80%を失った。それから20年2020年に光の使い「光使」の襲来によって呼び出される一人の少年。

2000 9 01 2:30:58

RECの文字が映る当時の最新型のビデオカメラに刻まれている。

ここは北極圏。この北極圏にて我々石神諜報機関は最近北極圏付近上空の大気圏にて異変の

調査にいた。

2001 1 01 9:58:09 時刻 00:01:000

00000000000000000000000000002

新年を祝う日本、アメリカ、中国・・・

それを装う様に北極圏付近上空の大気圏にて一基の隕石が墜落、衝撃波は地球全土を包んだ・・・

2022 8 09

201と公衆電話の残り数は書かれていた。

ガチャン・・・

電話の受話器を雑目にまるで投げ捨てる様に切る少年「草加部 竜」  
適格者とも言われる。

### 同日極秘会議室

<SOUND ONLY 1>

<SOUND ONLY 2>

<SOUND ONLY 3>

<SOUND ONLY 4>

<SOUND ONLY 5>

<SOUND ONLY 6>

<SOUND ONLY 7>

<SOUND ONLY 8>

< MOVIE / SOUND ONLY NEMA IS Sinzi >

< 分かつてるのか? ... 第一戦闘ポジションの配置は完了しているだけでは無駄なんだ ... by SOUND ONLY 4 >

< はい ... 分かつております。ただいまを持ちまして未確認物体及び特殊エネルギー源 ... 光使<sup>こうし</sup>を人造人間テス力 壱型に討伐させます by MOVIE / SOUND ONLY NEMA IS Sinzi >

< リンクチルドは? by SOUND ONLY 5 >

同時刻 旧東京 特別非難勧告が発令。

地球外未確認生物(UMA)と国連は認定。

一般的な兵器での攻撃は通用せずこのUMAを人類の敵と認定。

特殊特務機関 B C O D に今事件及び任務の指示、報告他の全ての権限が移行

「起動テス力は?」

「はい ... 先輩 ... えっと司令は壱型に発進 ... とのことです」

「壱型? 起動確率は?」

問いを続ける女性 ... 蝦夷 鈴はプログラム技術は一流、人造人間テス力の総合技術設計者でも

ある。15歳のとき事故により既に母は亡くしており、父親は詳細不明の状態とのこと。

「問題はリンクチルドですよね?」

「それなら大丈夫よ?」

・・・「只今緊急避難勧告発令中・・・直ちに避難してください、又一般回線は現在繋がりません」

「ダメ・・・か・・・」

竜は一枚の写真を・・・綺麗な女性の写った写真を見て大きくため息をついた・・・

<本当はどうでもいいんだけどな・・・>

そもそも竜の性格は内気な性格だ・・・人と絡むこともなくだから人から好意を持たれること勿論ないし、逆に嫌われることもない。まあ何事にも興味がわかない・・・といったところだろうか。

ズドン、ズドン・・・

巨大な地球にいるとは思えない人間？のような生命体が今自分の目の前にいることがあまりにもありえなく感じていた。

光使<sup>こうし</sup>とはもう20年近く前のことだった。

北極圏付近上空の大気圏から北極に墜落した・・・

BCODは勿論光使を知っていた。なぜ、彼等に一般兵器が通用しないのか・・・

それも勿論知っていた。20年前墜落した現場には不気味に光る人間？というか人型の化け物が立っていた・・・

そのことから光りの使い光使と呼ばれることとなった。

BCODの司令 草加部 信二・・・つまり竜の肉親にあたる人物だが彼がまだ5歳の頃に

彼に地球を守る仕事という名目をつけ、彼を捨ててしまった。

内気な竜にとって父信二は裏切り者で竜は嫌いだった。

どうしてこの期に及んで僕を再び呼んだのだから？

あの日・・・確かに僕を捨てたんだ！！

国連最後の切り札BC兵器又の名をBC2地雷の設置

<国連軍迎撃軍、戦車隊は緊急撤退>

ボタン！

うつむきながら公衆電話の前につたつていた竜の前に一人の女性  
がやってくる。

「HELLO 竜君だねえ？あ！私は梶 恵子作戦管理官よ・・・よ  
ろしく」

「あ、こんにちは」

「さあ乗った乗った！！非常事態なんだから」

梶は非常におてんばで竜をカッコイイ左ハンドルのBMWにギュウ  
ギュウと僕を押し込んだ。

「う・・・うわあ」

<全軍撤退。繰り返す全軍撤退>

双眼鏡片手に梶は汗を流して呟いた。

「まさか・・・BC2地雷？」

「BC2地雷・・・ですか？」

「知ってるかしら？国連の最後の切り札・・・生物兵器ってとこね・・・  
」

その瞬間、目の前で大きな光の柱が建っていた。

「草加部・・・相変わらず・・・国連は税金の無駄遣いが荒いな」

「な！石神副司令！！それは国連への反発か？貴様等のあの玩具の

ほうがよっぽどだ!」

「將軍怒らずとも・・・あれは別の連中のケツ持ちなんでねえ」

「BC2地雷 命中です・・・只今より3分カメラの事故修復機能のためモニターできません」

モノクロというか非常に美しくないモノクロが本部の巨大な画面に3分間流れた。

「どちらにせよ・・・貴様等に出番はない」  
ニヤリ・・・

信二の本性が出たところでカメラはモニターは再スタートさせた。爆心地の真ん中には修復中の光使が立っていた。

「フォースフィールド（F2）の発動・・・といったところか・・・」  
F2とは空間的な防御といったところだ・・・  
だが、人類や他の動物の類には強力なF2でないと肉眼で確認は不可されている。

「リンクチルドのデータの書き換え、現在第3ステージ」

「電力供給完了、脊髄、脳を中心に感覚神経、運動神経ならびに全ての末しょう神経を

リンクチルドと同一化完了です」

「第壹技術班は直ちにBブロックにて武具の調整にあたってください。繰り返します」

「オーライ、オーライ」

「強力な磁場を感知、現在光使のシードにより、地下都市リード・オグスに進行中

こちらBCOD本部に直接進行中」

「BCOD本部及びリード・オグスへの進入には残り9時間を切り

ました。第一層の高層盤に亀裂発生」

「了解、TESLA壱号機に脊髓機能のチップ挿入」

「どうしてだよ・・・」

光使の20年ぶりの襲来にあわただしい中・・・父親には小さくも聞こえた。それは息子の・・・

自分を捨てた父親への反感が入り混じったものだった。

「必要だからだ」

グサリ

生きること他人と関わることを嫌う信二にとって最も興味を示すものはTESLA、光使ぐらいであった。

つまり、たとえ自分の息子が今のように反感を持っていようが・・・逆に悲しんでいようが・・・興味がなかった。どうでもよかった。

それを知ってる竜だからこそ・・・父親とは会いたくなかった。

竜と梶の二人を見つけた蝦夷教授は、父親とともに竜にTESLAに乗るように指示した。

竜の目の前にはドラゴンのような鋭い目つきをしたカッコイイ巨人

「人造人間TESLA壱号機」

だった。

これを見て・・・5歳の男の子だったら、状況も知らないうちに乗り、結局乗りこなせず、死ぬか良くて意識不明・・・結果は死亡。

ましてやこんな極秘裏に作られて、組織自体も知られるようなことのないところで死んでしまえば、事故死に仕立て上げられるだけだ・・・

だが、竜にはもう一つ理由があった。

正直、性格的なことからネガティブ思考で逃げる生活してこなかった・・・だから、今回も逃げたい。

手をクックと握り締めたり、弱めたり、それを数回繰り返してから親に向かって叫んだ

「嫌だよー!!」

「どうしてだ？」

0・5秒

信二は竜が拒否をすることも、逃げたいということも分かっていた。

返す言葉もなくしてしまった竜には時間が加速・・・いや動き始めた。

ゴゴゴゴッ

徐々に光使のシールドが本部にまで進行をしていた。

と同時に竜の頭上に鉄筋コンクリートが3本・・・ゆっくりとも早く降ってくる。

死ぬ・・・

感情がそれ全てに一点したとき・・・

「テスラ起動!・・・そ・・・そんな・・・そんなはずがありません」

「脊髄神経及びシステム供給等は現在書き換え中です」

「ピットは？」

「現在リンクピットは挿入されておりません」

伏せていた竜が見たのは誰も乗ってないはずのテスラが大きなコードをつけながら、

血の海のような実験ヨウ素液から腕を出して、鉄筋から竜を身を出

して守っていた

ガッシャーン!!

「きゃ!・・・あうう!？」

いきなりだった。いきなり何かが倒れる音と何者かが叫ぶ・・・という悲鳴を上げる。

そこには自分と同じくらいの歳の女の子が骨折を腕と足、片目も治療中という状況・・・

一人で歩くこともできない。

はっ!

ここで逃げてはいけない・・・

逃げることにしかすがることでもできず、いつも誰かの腰ぎんちゃくのように生きてきたが、

今自分の意思をつむぎだす。

乗りたくない・・・乗りたくないんだ・・・でもここで逃げれば・・・一人のわがママが全人類を

いや、ましてやこんな大怪我をした人間に全人類の命を預けてはいけない。

「乗るよ・・・」

唐突にさっきとは違う人物のような顔した竜が信二に言った。

「・・・た・・・直ちにリンクピットの準備します」

一人の技術員が叫んだ。

「やれ!やるんだ!!」

<これでいいんだ・・・>

「リンクピット挿入。脊髄プラグイン導入、リンクチルドとのコンタクト開始、パルス開放。

コンタクト指数現在フィード7。8、9、10・・・リンク限界輪転まで0・3、0・2、0・1  
コンタクト及びリンク完了」

「了解。テスト番号機、起動確認、生命維持システムデバック。プログラム起動しました。信号拒絶反応感知されません」

「出撃！！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1772q/>

---

テストカ

2011年1月18日22時46分発行